羣書類從

二百卅八

内閣文庫
和書 類
一八六九〇號
六六六冊
二三六函
六架

内閣文庫
和書 類
一八六九〇號
六六六冊
二一五函
二一架

内閣文庫		
番號	和 18690	
冊數	666(301)	
函號	215	3

国立公文書館 National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan

群書類従巻第二百三十八

和哥部九十三　家集十一

権中納言俊忠卿集

検校保己一集

堀川院の御時内裏の哥題いとひ

いひいてゝためしに行けるみちは久しき世のためしに池の水に豊にあらし

同し御時鳥羽殿小弓幸廿日於池上花

千年すむ池の汀の八重櫻かけさへふかくにほふなりけり

おなし御時女房の花をそうえうけり

くしていつへけもしゝふあふさのおもそ

さ近川の月見し日

まふ次は殿の桜のにほひさ月ゐる人をしはし海めのを
柳も絶りれそしもしてうへのをはせ
ゆくもうるまをの君かする女房のうたり
色のかうかしうたようて涼ゆ織物きて
に月なられ時

又女房の哥をよみしくさば殿にわ

小大進

清ふかきは思ひわれと志はる男を志る君の所をたる

道し

思ふ深に柳めそふ雨の露をきせつる人の谷山をさして帰る

又あはれ心を人くよみけ小とも

新勅
みし海江の仮殿にゆくまま毎草ゆゑてま前の志もすいふ

又題をしゆくりて孩乃くく哥かまそまり

まうしに清ゆかなよなとにゐて

ゆいいはま方まあれきれ徒ほ江海の志をせにける約かの

夏乃夜をも後のくさまつめて寄そそ

海川のましうちのほとり

住乃江乃あさゝはにすたく夏虫を草葉にぬきとむ玉と
しもとるら

篤子
中宮御方よりわさと蛍むしてまいらせ

康和四
五月乃郭公をゆふかけてはかりせられしに

五月やみたれかもしらむ山乃おくふかきなくは声なきときく

中宮御悩ませし時御祈り物に
ありあひてのちにつかうまつる

あかつきのまちし秋のよのきえ惑しさにかはりてぬる袖をとふ
いつかは

雪の夜寄人くはしゆく時

こゝろけのありけるよしのめとも山の椎柴のあをなをみてしほる
しらる

正月廿日ころ雪のふりしに二条の家にて

数へみえんなとおもひしにむかし乃朝臣の
もとにいひつかはし

平
咲花もしる梅乃たちえにふる雪はきえぬる枝をよそへてこそ
思へ

返し

日
梅か枝に心をゆきてかきりなきこゑてふや人のかへといふらし

東山乃花のさかりに人くらしけるに

ありし山をおもひて花をみるわたしかはる心ぞ

あふ坂乃せきちにて同じ山ぞへいくなる人に風をさそへる
しらぬ

人もしらぬ人にしてあふさか山とふらるゝと

かこの海乃わたりにまかりける舟のゆきすくに守のみえしを人の志まほしね
るる

国立公文書館
National Archives of Japan

敵殿ろ多経てしら五月五日源中将くに
はゝ乃きみんさう地こうして侍しかつかに
をおくりいてけり

手　すゝ人もらん七枝にかゝる菖蒲をもみさいあやめもしらぬ涙なからも

返し　中将

あやめ草ひきまき菖蒲とみてしも涙のかゝりし袖と思はるゝやれ

家乃哥合より花をよめる

金　小月やと花構そあるかいぬく風乃何も小花を宣にしりける

こひ

西　我恋はあまたりしも小人く清つかゝる時なき浪乃志す葉

二条乃家よりて十首せさひけるに
小よまむとし時

占恋

手にとるも枕に何しねは思ひの人にたえぬ物ならはこそ

来不留恋

我恋はくすかしの風よやなりきもあへぬ命かは

指恋

いかて我心はしりぬ乃由つくる鏡よかけて人のおもかけそしむ

たた聞無實恋

あはくてかはかりはまにねは浪にまれもやれ立つへれや

祈不逢恋

あまたゝひかはらぬ神にねきつくるかひはすにあふことそなき

追従恋

やまもとのさくら花許にまかけるんとまたひく後もとうしくやみえん

偽不逢恋

あふ事もなしうき海のこなた人心ほすねくまことのつゆけて能思ふ

聞音恋

よるまても思ひ実地にかはる旅ねや鳥のねよみかえり行くつ

獸賤恋

数ならぬいやしき身なれはきよくかゝる袖のかは雨のあめて袖行

ゆくへの花のかけをしの春に待をしかへ
はるのひかくれおはしましけるに中宮女房にやよひ
後のうへ院へまゐりて後川のまし
おもひきや春にかへる花の数なきまの身にさへあはぬ物とは
ひとりのみかはる世の人の女はう
返し
雪のきえ跡ふる花のみなしへ春まにぬる袖にはまよふかれ
身をしられてかはしの家をしとめて
同し年九月十二夜
かのみん世の心のやともいろはもかつのつれ里にたえめる月この都

たのみし一筆にて文のかはしの春秋をかきとめん

花をもみし心を

世の中はさはいかにかはらむ梅の花のにほひもとめくる花を尋ねし

八條の家にて哥合に草花露といふことを

金
夕露の玉かづらして女郎花野原の風にをれやふすらん

月

くもりなくてらす光の影にすむ月へたてなきこの鏡かな

鹿

秋萩の花かりふしにさをしかの鳴こゑきくを小萩のつゆの露をちらして

寄瀧戀

詞
おもひあまり[illegible]やいかにせん[illegible]滝やなみだの[illegible]の

法輪寺にまうでゝ 敬大納言 忠家 教家のもとへ

のぼらんとおもひけるに雨のふりければとゞまりて

さりけれ

新古
ゆきとまる霧のまがきにはなの野の色はれてしかは尋ねしらなん

秋ふかくふみわけかねつ露しげき花野の[illegible]

月

山桜のよし松のはしにはかはらぬもやまさしの心なりけり

堀河
嘉保三年二月廿一日花押千年

左廿将

君か代乃はしめに世をふへきためしにて花もちとせの色に成けり

鳥羽殿哥合

花為春友　左中将

きみ乃春はかさねて小野の揺霧もところにほうらむ

御前にて五月雨を名所によせて人々
つかうまつりしに

少将

時しもあれ猶しはれまなき淡路乃浦よ日数かさね雨そふりまさる

永久四年閏正月廿五日（鳥羽）

鳥羽殿　梅花薫衣　参議

袖かきて梅もえおほつかな花乃色にそむる匂ひをいかにわかるめそ

題不知

山ちかきふるさと人の梅しはなにみえかしなを
わきてやはまさる

右俊忠卿集以村井古巌所蔵京極黄門真蹟摸寫本書写